

「第6回男性介護者ケアの集い」ニュース

令和4年6月28日(火)「第6回男性介護者ケアの集い」を開催しました。今回は、認知症の人と家族の会長崎県支部佐世保地区会(はなみずき会)の男性介護者の会の大野健治さんをはじめ2人の方に参加して頂き、介護の体験談をお話していただきました。

佐世保のはなみずき会の紹介

2008年に認知症の人と家族の会佐世保地区会(はなみずき会)を発足。さらに2010年に男性介護者の集いを発足。認知症への理解を深めるために、長年にわたり積極的な活動を展開されています。今回は、男性介護者の会の大野健治さんに介護体験を話していただきました。

大野健治さんの講演について

・妻が50歳の時に「買い物で同じものを買ってしまう。お金の計算ができなくなる。食事の準備ができない。洋服が着れない。時間がわからない。字が書けない。」などの異変に気づき、病院を受診。「若年性アルツハイマー型認知症」と診断され、ショックを受ける。健治さんは、早期退職をして妻の介護に専念。自分一人だけでは介護しきれないと、兄弟や近所の人に妻が「認知症」であることを打ち明けたことで気持ちが楽になり、周りの人も応援してくれるようになった。認知症は、「脳の病気」と割り切り、間違っても「よか、よか」と笑顔で対応すると、本人も笑顔に変わっていった。本人の様子をよく観察すると変化に気づくようになった。「できない」ことも増えるが、「やりたい」という本人の思いを尊重し、できないところを支援する。本人の不安を和らげると、行動・心理症状の出方もいい方向に変わった。5年が過ぎ、介護保険を申請。要介護3の認定を受け、ケアマネなど介護の専門職に遠慮なく相談し、介護の方法を学んだ。自分の時間を持ち、趣味や友達とのつながりを大切にすることは、自分の精神状態を安定させ、介護を長続きさせるために必要だと思った。8年が過ぎ、失禁、徘徊、昼夜逆転などがひどくなり、10年目で介護4、13年目で介護5となり、パーキンソン病様症状など運動障害も出てきた。状態がひどくなくても、妻の友人が家に遊びに来てくれると、本人もしっかりと受け答え、化粧を喜び、認知症とは思えない妻にもどる。本人の楽しみや居場所を見つけることは大切。今、24年間の介護生活を終え、介護は大変であったが、妻との関係は深くなり、妻に感謝していると話を結んだ。

『大野さんの介護のポイント』

- ・早期受診、早期診断により、認知症の種類を知り、症状や行動を学ぶことで対応が変わったこと。
- ・介護者も自分の趣味活動や友達とのつながりを大切にし、自分の時間を持つように努めたこと。
- ・認知症は、脳の病気だと割り切り、病気のことを身内、近所の方、夫婦の友達に伝えることで、協力を得たこと。
- ・行政、包括支援センター、介護事業所と密に連絡を取り、介護のわからないことは、専門家に気軽に相談したこと。



佐世保地区会の大野健治さん、中村晃さん、吉開靖之さん

参加者からの感想

後日、佐々の参加者から感想を頂きました。

- 佐世保の男性介護者の会の皆さん、ご高齢ながら介護者の会でご活躍されておられ、感心しました。長期に渡る経験は、大変だったことと思います。今後、連れ合いに何かあれば、皆さんの助けをお借りしたいと考えています。
- はなみずき会の方のお話を聞いて大変参考になりました。大野さんは、奥様の様子を細かく観察されていたのが、資料を見たりお話を聞いてわかりました。病気のことや認知症のことを勉強されているのもわかりました。
- デイサービスやショートスティを利用しながら、自分なりのできる範囲でやっていこうと思っています。
- 会社を辞めて妻に尽くされたのは心を打たれましたが、収入がなくなり、金銭的な問題の心配も気になりました。
- いろいろな人の協力を受けながら、無理なく長く介護生活を送りたい。
- 年表にしるされたご夫婦の24年間の足跡、お二人のかけがえのない愛情を感じました。
- 辛いを幸せに変えられたのは笑顔。そこから生まれた言葉が「捨てたもんじゃない」「妻に感謝」
- 自分だけの中に留めずに、身内に友人に仲間に、ありのままを伝え続けてお願いされている姿勢。周りの方々をよい意味で巻き込んでこられたのだろうと思いました。心を開くというのは、こういうことなんですね。
- 認知症は、アルツハイマー型認知症以外にもいろいろあることを知らなかったので驚きました。医師からの説明もなく、自分も勉強不足でした。



集いの様子。佐々町から6人が参加

次回の集いのお知らせ

日時：8月23日（火）

10時から12時

場所：健康相談センター 会議室

初めての方も気軽にご参加ください。

編集後記

佐々町の参加者は、介護を始めたばかりの人が多く、「今回の講演で認知症の症状や問題行動の解決策や介護のポイントを学び、非常に勉強になった。あっという間の2時間で、皆さんもっとお話を聞きたかった」と言われていました。今後もお互いに交流を深めながら活動を続け、認知症への理解を多くの人に伝え、認知症にも優しい町づくりを行っていきたいと思います。